

視覚探索課題を用いたベビースキーマの検討

注意捕捉効果

山田 博之

我々の多くが、子どもや幼児を見るとかわいいと思うであろう。この“かわいい”には生物学的な基盤がある(入野野, 2009)。Lorenz (1943) は、大きな頭、丸い顔、太った頬、高く突出した額、大きな目、小さな鼻と口などの子どもの身体的特徴をベビースキーマと呼んだ。このベビースキーマは、注意捕捉効果を持つことが知られており、このことは、Brosch, Sander & Scherer (2007) のドットプローブ課題による実験によっても示されている。しかしながら、視覚探索課題においてもベビースキーマの注意捕捉効果が期待できるかどうかは示されていない。現在のところ、顔の視覚探索課題に関しては、Hansen & Hansen (1988) らの実験により、脅威を感じさせる怒り顔が注意捕捉効果を持つことは知られている。脅威刺激においては視覚探索課題による検討がしばしばみられるのに対して、視覚探索課題を用いてベビースキーマの注意捕捉効果を検討するという試みは今までなされていない。本研究では、視覚探索課題を用いて、ベビースキーマの注意捕捉効果の検討を行った。

実験では、ベビースキーマを多く含む幼児顔線画とベビースキーマをあまり含まない普通顔線画をオブジェクトとして用いて視覚探索課題を行った。探索画面は、普通顔の中から幼児顔を探す条件と、幼児顔の中から普通顔を探す 2 要件であった。また、それらに対して、顔線画はすべて正立の条件とすべて倒立の、2 条件設定された。課題は、呈示画像内のターゲットの有無を判断するものであった。その結果、各条件間に有意な反応時間の差は見られなかった。しかしながら、呈示画像内の顔線画が正立している場合に、幼児顔の検出の正答率が、普通顔の検出の正答率より有意に高いことが示された。その一方、呈示画像内の顔線画が倒立している場合には、検出率の有意差は見られなかった。

これは、幼児顔は多数のディストラクタの中に存在したとしても、存在を見過ごされにくい、ということを示している。このことは、ベビースキーマの効果の一つであると考えられている、周囲の個体の保護を受けやすいという効果と一致すると言える。今回の研究結果では、正答率において有意差は見られたものの、反応時間において有意差が見られなかった。ベビースキーマに注意捕捉効果があると示すためには、今回実験に用いた顔線画は単純化されすぎていた可能性がある。今後視覚探索課題を用いてベビースキーマの注意捕捉効果を検討する場合は、今回実験に用いた単純な顔線画ではなく、よりベビースキーマを多く含む、ある程度リアルな刺激画像を作成して用意することが求められるだろう。(基礎心理学)